



ゴジラと核兵器

第26号

人類の未来は 変えられる



1 地中に住んでいた微生物が、とある国の度重なる地下核実験などの影響を受け、放射性物質を取り込んで巨大な怪獣「ゴジラ」と化した。

2 地中に取まりきれなくなったゴジラは地上に現れ、餌である放射性物質を食べようと、次々と原子力発電所を襲う。原発が密集する日本や韓国は、ゴジラにとって格好の餌場となってしまった。日韓各地で放射能汚染が広がった。

3 日本と韓国を行き来して原発を食いあさったゴジラはその後、北朝鮮、中国、インド、パキスタン、イスラエル、フランス、英国、米国、ロシアと、核兵器や原発を食べながら移動。世界各国は協力し、ゴジラを北極海でフリーズさせることになんとか成功した。

4 ゴジラは凍って動かなくなったが、原発や核兵器をゴジラに食い散らかされた地域は放射能に汚染されてしまい、地球に「核の冬」の足音が…。

核の冬…

この物語は、高2岡田春海、二井谷菜、森本芽依、高1山田千秋、中3岩田央、上長者春一、中2平田佳子、増田奈乃佳、中1川岸言織が作りしました

怪獣誕生

私たちが考えた新しいストーリー

原発襲撃

フリーズ

この物語はフィクションです。被爆者を差別するものではありません。

国際原子力機関（IAEA）によると、原発は日本に43基（世界で多い方から3番目）、韓国には24基（同6番目）あります（1月7日現在、停止中を含む）。ロシア、米国、フランス、中国、英国、パキスタン、インド、イスラエル、北朝鮮は、核兵器を保有したり開発を進めたりしているとされる国です。

「核の冬」は、核爆発による火災などで、ちりなどが空中に上がり、太陽の光が遮られて気温が大幅に下がる—という、1980年代に示された仮説です。

核兵器は人間が造りました。それによってゴジラが現れました。核被害の犠牲になるのは地球全体。人類の判断と行動で、未来は変わるはずですよ。

1954年公開の第1作目のゴジラ (©東宝)



第五福竜丸被曝 上映と同じ1954年

東京の展示館取材



保存された第五福竜丸の前で話す安田さん(右)

「原水爆をなくすためには、まず戦争をなくさなければいけない。そして、原水爆の恐ろしさなどについて十分知ることが必要です。例えは、オバマ大統領だけが核廃絶を主張してもなりません。米国民みんながなくなるとは、と云えば廃絶に近づいていくわけですよ。」

（高2森本芽依、高1山田千秋）

第五福竜丸・ビキニ事件 米国が繰り返した水爆実験のうち、1954年3月1日から5月14日にかけてマーシャル諸島のビキニ環礁などで6回実施、多くの日本の遠洋マグロ漁船が被曝した。3月1日の実験で第五福竜丸の乗組員23人が被曝。半年後に無線長の久保山愛吉さん(当時40)が「原水爆の被害者は私を最後にしてほしい」という言葉を残して亡くなった。5月4日の5回目の実験では、広島や京都、東京など各地で放射性物質を含む雨が降った。基準を超す放射性物質が検出されたマグロなどの魚が大量に廃棄(はいき)された。(高2森本芽依)

戦争の怖さ知らぬ国会議員に

この映画を見てほしい

第一作の「ゴジラ」に主演した俳優の宝田明さん(81)の写真に「ゴジラ」への思いを電子メールで聞きました。(中3岩田央)

「被爆・終戦から9年後、第五福竜丸・ビキニ事件が起きた中で「ゴジラ」に出演するのは、どんな気持ちでしたか。」

私は戦時中、当時の満州(現中国東北部ハルビン)に住んでいました。終戦と同時に侵入してきたソ連軍に、腹部を撃たれ、九死に一生を得た経験があります。戦争の悲惨さをこの身で体験していただけに、「ゴジラ」は単なる怪獣映画でなく、反戦・反核をテーマにした作品でもあると感じました。広島、長崎の被爆、第五福竜丸の事件を経験した日本人

「世界から核兵器がなくなっていない状況はどうしたらいいと思いませんか。」

第一作の「ゴジラ」を国会で上映し、戦争の恐ろしさ、核の脅威を知らない国会議員に見てもらいたい。各大学や、世界各国の議会でも上映会をしては、今も十分通じる大切なメッセージがありますから、これが一つの方法かもしれませんね。

主演した俳優 宝田明さんに聞く



「平和や命の大切さをいろいろな視点から捉え、広げていく」種が「ピース・シード」です。世界中に笑顔の花をたくさん咲かせるため、小学6年から高校2年までの45人が、自らテーマを考え、取材し、執筆しています。

△ピース・シード▽

平和や命の大切さをいろいろな視点から捉え、広げていく「種」が「ピース・シード」です。世界中に笑顔の花をたくさん咲かせるため、小学6年から高校2年までの45人が、自らテーマを考え、取材し、執筆しています。